そして星屑は消えゆく

真月乃

1

よくさ、数人で閉じ込められて順番に1人ずつ消えてくって話あるだろ？
殺すとかなくて、もっと平和。建物に閉じ込められるけど、食料とかもあって生活には困らない。
ただし毎日1人ずつ【消えて】いく。そうだな、それは別空間とでも認識されるのかな。
そこで消えたら現実世界ではどうなってるかは不明。死んでるかもしれない。
で、もし選べるとしたら。1番最初にいなくなるか、1番最後まで残るか。お前、どっちがいい？

2

「この状況で洒落にならん」
私はハインリヒの質問に答えた。

ここは国際宇宙ステーション２。
初代が老朽化により破棄され、新構築された最初のクルーとして我々９人が配属された。
が到着早々、全ての通信機能がシャットダウン。我々は宇宙の密室に地球から隔離された。修理が出来なければ、死を意味していた。

「逆にお前なら？」
「最初かな。残される不安はゴメンだ」
そう答えハインリヒは数分後に忽然と消えた。

ステーション２の広さも前基とほぼ同じサッカーのピッチ程だ。
と、言ってもそれはソーラパネルの広さであって実際の居住区は観光バスが６台程だ。
実験装置や生命維持装置、管理システムに問題の通信システムを司るコンピュータなどは全て壁に組み込まれ、人が隠れるスペースなどは限られている。
寝袋の様な寝室に掃除機の様なトイレ、お椀の様な天体観測室、唯一の広さがあるのが体力維持の為のトレーニングルームだった。

本来ならば異常事態は直ぐに船長であるコマンダーに報告すべきだったが、人がこの密閉された空間から消える訳がない。何故なら、例え船外に出ようとしても一人で宇宙服を着る事は出来ないし、万一出来たとしても、外との隔壁を開ければ警報が鳴るのだ。しかし、船内は極めて静かだった。
そう、静か過ぎる。他の誰もがハインリヒの姿が見え無い事に気付いていない様なのだ。
私は改めてクルー６人の表情を見つめた。
６…人…⁈

5

私を入れて７人⁈
…ベンが居ない！
私はステーションの中を二人の姿を隈なく捜した。だが、何処にも居ない。
これは異常事態だ。私はコマンダーに報告した。

「何を言ってる？我々は最初からこのメンバーじゃないか」
コマンダーも他の５人もが、私の報告を笑い飛ばした。
「この状況下だ、お前は疲れてるんだよ。少し休め」

私だって宇宙飛行士だ。この位の状況でパニックなど起こさない。
これは、陰謀に違いない。

もしかするとコマンダーも他のクルーもテロリストなのではないか？
いや、しかし、私達は七年もの間を共に過ごし、団結したチームだ。疑う部分など無い。
では何故？惚ける？
いや、もしかしたら、本当に最初からハインリヒとベンは居なかったのでは。

「残される不安はゴメンだ」
ハインリヒの言葉が蘇る。あれは確かにここで聞いたのだ。

食事の時間になり、私は確信した。
食事の席にはアーノルドが居なかった。

「本当に大丈夫？アーノルドなんて人最初から居ないわよ」
「パニックになってるのね。大丈夫、６人で乗り切りましょ」
フランソワとエリス、二人の女性が私を気遣い背中を摩った。
私は無重力の中を呆然と壁まで流された。
「あり得ない…偶数なんてあり得ないだろ！」
私は壁に怒りをぶつけた。
アポロ時代から飛行士は奇数なのだ。緊急事の多数決の為だ。
「いつの時代の話しよ」フランソワは呆れて自分の任務に戻った。

それが彼女を見た最後だった。
私は完全に孤立していた。
何もかもが信じられなくなった時、私はコマンダー専用のデバイスを覗き見てしまった。

▼コマンダー生還手順
1.H-救助要請
2.B-バックアップ処理
3.A-支援システム起動
4.F-備品使用
5.G-突発事故対処
6.E-緊急退避
7.D-破壊装置起動
8.ｉ-点火

私は気付いた。次に消える順はゲーリー、エリス、デニー、そして私…イダだ。

「自分が何か思い出したか？Mr.IDA」
「コマンダー以外は緊急時対処用ヒューマノイド」
ステーションがトラブった時、破壊装置デニーに対し私が〈IGNITE〉点火キーになるのだ。
今頃私の本体はNASAのベッドで高鼾だろう。

「ステーションも君らも失敗だ、破棄せよ」
コマンダーは脱出ポッドに消えた。

任務についた皆は機械になっている。
ハインリヒ、君の言うとおり最後まで残るのは辛いものだな。

――おわり

そして星屑は消えゆく

http://p.booklog.jp/book/89798

1パラグラフ著者：ハイリ
special thanks：novelnove

著者：真月乃
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/makototukino/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/89798

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/89798

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ